

毎日の保育問題 (四)

上澤 謙 二

七 はじめてのスキップ

『よあ、Tちやん』

聲をかけるミ、Tちやんがミび出した。

これには聲をかけた先生がはつこした。だから子供の中の或る者が『あゝ』といつたのも無理はない。

Tちやんはけつしてスキップをしない子供だった。お仕事もよくする、自由遊びにも活動する、團體のキマリにもよく従ふ、歌もうたふ、運動もする。けれどもスキップだけはさうしてもしなかつた。

それが今、順々にスキップ廻りがはじまつて、Tちやんの番になつたので、到底だめかと思つたが、それでも——ミ、試しに聲をかけるミ、ミび出したのである。

はつこした先生は、又はつこ目を見張つた。割合よくや

る、リズムにも相當乗つてゐる、それで案外だったからである。

Tちやんは用心深い、寧ろ内氣な子供であつた。だからスキップも、恐らく人の前で相當やれるといふ自信がつくまではやらなかつたのであらう。それがさうなつたので、やりたくなつてきた。さうして遂に今日の實行ミなつたのであらう。

先生はさう思つて、ひそかにうなづいた。

然し何さいつても訓練が足りない。みんなの前を一回して二回目の中頃になるミ、調子が崩れてきた、見る／＼チグハグがひびくゝなる。

急にTちやんの顔がゆがんだと思ふミ、兩眼に涙がキラツミ光つた。

先生は又もやはつこした。

「きつこ泣き出すだらう」こ思つたからである。「泣き出してやめたら——この最初の経験が苦いものこなつて、今までよりもスキップに對する怯懦と嫌悪が烈しくなり、折角の奮發がかへつて逆な結果を齎らすやうになるだらうこ思つたからである。

それで「これはさうかしてやり遂げさせなくてはならない」こ思ひ立つた。「それならさうするか？」

見よ、もうTちやんの頬にはほろ／＼こ涙が傳はりはじめたではないか。

先生は自分からこび出して、Tちやんの手を取つて『さあ、先生こいつしよにやりませう』こ足並をそろへてスキップしようこ思つて、腰を浮かした。

その時である。

子供達のうちの二三人があつ、Tちやん、泣き出し……

こいひかけた。

先生は更にはつこした。

こんな言葉がTちやんの耳にはいつたら、忽ちその場へ突立つて、大聲を揚げてわめき出すこは、鏡にかけて見るよりも明かだからである。

いひをはらぬうちにその言葉を打ち消さうこして、先生はいきなり聲をかけた。「いきなり聲をかけた」こいふよりは

も「おのづからつるりこ言葉がすべり出た」こいふ方が、眞に近いかも知れぬ。

『さあ、みんなお手々をたゝいて……』

さうして先生自身たゝきはじめるこ、みなそれに倣つた。勿論いひ出した子供も、口を結んでいつしよにたゝいた。

この一同の拍手が、この場合、Tちやんに取つて非常な奨励になつたのである。

涙を頬に流しながらも、両手を腰に置いたまゝスキップをつづけて、さう／＼泣聲一つ立てず、終りのころまで廻つてきて、席へ戻つたのである。

「あゝ、これがよかつたのだ」こ、先生はほつこ胸をなせおろした氣持である。

初め考へたやうに、その時こび出して、いつしよに手を組んでやるのも一つの方法にちがひない。それはかういふやうな場合に、普通に行はれるこころである。けれども、それは要するに加勢である、助け舟である。だから、そこまでは自發的に獨立的に進んできたものが、手を組んだ瞬間から他動的、依存的に豹變してしまふのである。満心満身の力を籠めてこび出したものが、御厄介になつて、面倒をかけて、ひきづられてやつこおしまひになるこいふわけである。決して理想的こはいへまい。

或は『Tちやんしつかり』こか『Tちやんは強いね』こか

『Iちやん、えらい、おしまひまでやるよ』とか、聲援を與へることも、一つの方法にちがひない。けれどもそれは美辭、讚辭、賞辭に乗せて、その勢ひで引張つてゆくことである。この種の言辭の常として多くは過大に失し誇大に流れる。それだけに調子づかせ、いゝ氣にならせ、あまへるやうな氣持にさへならせぬことも限らない。それだけに他に依り、他に頼む氣持が働らく。それは言葉に限られて、手や足にまで及ばないので、前の方法よりは自發的、獨立的の要素が多いが、まだ他動的、依存的の臭味を脱しきらない。

ところが拍手は音であり響きであつて、第一の方法のやうに一定の運動を、又第二の方法のやうに一定の觀念を、他から持つていつて與へるのではない。こゝに生まれるものは高響による精神的な感應に外ならない。無形であり無内容であるだけそれだけ純粹なものである。純粹なだけそれだけ、それによつて起される動機を自發的に獨立的にするものである。

かくて自發的獨立的に始められたIちやんのスキップは、中途で停頓したにも拘らず、自發的獨立的な經過を取つて終るこゝができたのである。

この最初の經驗を、更にうれしい、快いものにするために、先生はIちやんを大に褒めてやらうと思つた。褒める

のはしたそのこゝに近い方がよい。實際に遠ざかると、印象も稀薄になるので従て感銘も薄い、従て効果も薄い。殊に幼児に於てさうであるとは、一般に謂はれるところ。先生はすぐにそばへ寄らうとしたが、又もやはつゝ立ちま

つた。見よ、Iちやんは聲こそ出さね、まだしやくり上げてゐる、涙が流れ出してゐる。心中の激動が猶收まりきらないのである。生まれて初めての經驗を、かゝる曲折を通じてやつゝ突破した。努力は大變なものだ。だからかゝる有様なのは當然である。

もし今、刺戟を與へるならば——言葉も勿論刺戟である——それがたさへ賞讚であるにしても、直に激動の波にひびいて渦巻を起して、恐らくはワツゝ泣き出すであらう。それで先生はわざゝ、次の子供を名ざして、スキップをはじめさせた。

場内はもこの氣分に還つて、ピアノのリズムミ足のひゞきは、さも面白げに僭調する。やがてIちやんのそばへ行つた先生は、しづかに頭を撫で、いつた。

『Iちやん、よくおしまひまでやつたね。強かつたね』

Iちやんはだまつて下を向いたが、ニッコリした。

八 めてたい大團圓になるまで

Iちやんが遊んでゐたボールをかたづけた。けれどもそ

れを棚の上に置いた。

『そこへ置くのぢやないでせう、お抽斗へ入れるのでせう』、先生が注意しても、すぐに『はい』といへない例の癖が出て、だまつて自分の席へかへつてしまつた。

『なぜ、先生のいふことを聞かないんですか』と咎めて『きうしてもちやんごしまはなければいけません』といつて片づけさせてやらう。先生の權威を示さなければならぬ。

先生は先づさう思つた。

それでもわるくはない。けれどもそれはもう度々やつた方法だ。何かほかにないか考へる。

『ごらんなさい、こゝへしまふ方がいゝでせう。みんなここへしまふでせう』と、抽斗へ入れて見せて『分かつた？』これからこの抽斗へ入れますね』とたしかめてやらう。先生の親切を示してやることにしよう。

それでもわるくはない。けれどもそれはまだ弱いやうな物足りないやうな感じなので、考へなほす、ふつ考へつた。

『さうだこれをやらう』ときめた。

それで子供達みんなに話しかける。

『ね、Iちやんがあそこへボールをしまつたけれど、あそこでもいいから』

先生はIちやんとの個人間の關係を、みんなとの團體的關

係に移すのである。

『あそこではいけません』と、大勢が口々にいふ。

『それではこゝへしまつたらいいでせう』と、先生がみんなに聞く。

『ここではIちやんは全く引込んでしまふ。さうして問題はみんなの問題』となつたのである。

『お抽斗へしまふの』と、大勢が答へる。

『さうね、あなたが先生におしまひなさいといはれたり、お抽斗へしまひますね』

さういつた先生は、この點を深く強く印象するために、わざと二人程の子供に聞く。

『Sちやんも、Rちやんも、お抽斗へしまふ？』

『ええ』と答がある。

『お抽斗へしまひます』と答がある。

『この點を深く強く印象する』とは、誰に向かつてさうするのかがいへば、申すまでもない、Iちやんに向かつてである。だから、わざと聞いたSちやんは、Iちやんのすぐ隣りにすわつてゐる子供、Rちやんは一人置いてその隣りにすわつてゐる子供である。

Iちやんはさすがにうつむいてゐる。間接ながら自分の行動が團體的批判を受け、又具體的な模範を二人のお友達によつて示されて、應へたらしい。

さうして見て取つた先生は、問題をいちやんの上に轉じた。

『いちやんもお抽斗へしまひますね、しまふでせう』

けれどもいちやんはうつむいたまゝで應じさうもない。

思つたより手ごわい。それで先生は問題を團體へ返して、

今度はみんなさいちやんの關係にする。

『みんな、いちやんを見てごらん、立つていつてボールを

抽斗へしまひますよ、きつこ——ほうら——』

しかし『きつこ』でも『ほうら』でもない、いちやんは依然

としてうつむいてゐる。

そこで、このままで置くわけにはゆかぬ、さいつて突

放してしまふわけにもゆかぬ、それで問題を發展させる。

「發展させる」さいふ意味は、いちやんに對する間接の程度

を一段狭めて、直接に近くすることである。その意味でみ

んなに聞く。

『あなたがたね、先生が「ボールを抽斗へおしまひなさい」

さいつても、きかない子供があつたら、その子供、すき？』

『きらひ』『いやな子』なごご、答がある。

『さうしたら、その子供をさうしたらいゝでせう』

すぐに答は出ない、みんなちよつこ考へる。が、やがて

ひごりがいひ出す。

『その子供、吐ります』

するさ、つゞいてあちこちからいふ。

『しまはせませう』お母さまにいひつけます』なごご。

『このお部屋から出してしまひます』さいふ言葉もさび出

してくる。するさつゞいて『表へ出しちやつてもう入れな

い』さいふ言葉を添加する子供もある。

餘りきつくなつて、個人的な非難攻撃に嵩じてはなら

ぬ。そこで先生は方向を變へる。

『ぢやあね、その子供がね、きかないのをやめて、先生の

いふ通りにボールをしまつたら、さうしませう』

子供達は又ちよつこ考へたが、やがて口々にいひ出す。

『よくいふことをきいたねつていつてやります』『ほめて

あげます』『いつしよに遊びます』なごご。

『さういふ子供、あなたがた、すき？』

たゝみかけて聞く。

『すき』『よい子供』なごご答がある。

その問答の間ぢゆう、先生はそれさなくいちやんの様子

に注意した。みんなが『いやな子』と斷定して『お部屋から

出してしまひます』さいふ説さへ提出された時は、びつくり

したやうに顔を舉げてあちこち見廻したが、又うつむい

てしまつた。次で場景一變。『よい子』さいふ斷定があつて

『ほめてあげます』さいふ意見が提出されるさ、再び顔を舉げ

てあちこち見廻した。が、さつきさのびつくりしたやうなお

づづした様子に引きかへ、今度はおちついた、そして何か

キリットしたやうな氣合さへたどよつてゐるを見られた。

『Iちゃんはきつこよい子になります、抽斗へ……』

先生がこゝまでいつてくるこゝ、もうIちゃんは立上がつつた。サツサ柵のこゝろへいつて、ボールを取るこゝ、抽斗をあけて、しづかにその中へ入れて、ちやんこしめて、席へ戻つてきた。

先生はこゝろしながらみんなにいふ。

『まあ、みんな、Iちゃんのこゝろ見てちやうだい。よい子になつたでせうか。』

『なりました』と、異口同音にいふ。

『よい子になつたから、さつしてあげませうね』と聞く。

『ほめてあげます』と、異口同音にいふ。

『ちやあ、ほめてあげませう』

先生はIちゃんを立たせた。みんなの拍手が一齊に起つた。パチく、パチく！

Iちゃんはうれしさで恥かしさがこんがらかつたやうな表情をして、しかしちやんこ立つて拍手を受けた。

かくて或は吐つて、或はたしなめて終るべかりしこの事件は、關係を個人から團體に移すこゝによつて、一方は觀察しつゝ批判しつゝ、判断しつゝ、他方は内省しつゝ、考慮しつゝ改善しつゝ、相互に益し益されつゝ、自然に又自發的に、めでたい大團圓に達したのである。

保育實習科生徒募集

(官報抜萃)

本年四月入學セシムベキ保育實習科生徒ヲ募集ス
其要項左ノ如シ

昭和十六年一月 東京女子高等師範學校

一、募集人員 凡ソ二十四名

二、出願期限 二月一日ヨリ同二十八日マデ

三、學 資 學資ハ總テ自費トシ 授業料年額金
五十五圓ヲ徵集ス

四、選抜試験 入學志願者ニ對シテ學科試験身體
検査人物考查ヲ行フ

1、學科試験 國語(解釋、作文)、理科(植物)、
圖畫(自在畫)、音樂(唱歌)

2、期日 本年三月四日、五日ノ二日間

3、場所 東京女子高等師範學校

(附記)出願の手續其他詳細の事項は之を記載せる印刷物を用意せるに付其送付を希望する者は差錢郵券を貼附し宛名を記載せる封筒を添へ本校教務課に請求すべし